



「当たり前に挑戦する心理学」で挑んでみた

広島大学大学院教育学研究科 教授

森永康子（もりなが やすこ）

日本心理学会が主催する「高校生のための心理学講座」が昨年も広島大学教育学部で開催されました。やや地の利の悪い広島大学ですが、9月中旬の連休ということもあってか、遠くは関東や九州、近くは地元の東広島市を中心に中国四国地方の高校生や保護者、そして、社会人のみなさんに参加いただきました。講座を担当したのは、本学で心理学を担当する5名の教員。発達、臨床、認知、教育そして社会という広島大学教育学部ならではのバラエティに富む内容の心理学講座を提供できたと自負しております。

私は広島大学に着任してようやく3年目です。小規模の私立女子大学で働いていた頃は、高校からお呼びがかかると、せっせと出前講義をやっていました。高校には「心理学」という科目がないので、高校生たちは「心の闇」をあばく」「人の心が読める」といった歪んだ心理学イメージをもっているのではないかという先入観をもって授業を組み立てていました。内容は、「心理学には臨床心理学以外にもいろいろあって」「子どもが言葉を話すようになるプロセスについて研究している心理学者もいるし」「一度にどのくらい記憶できるかという研究もあるし」そして「こうした研究のためには、実験や調査をすることが多くて」「平均値を出したり、それを中学生と高校生で比べたりもする」という超入門編。もし、「心理学とはすなわち、心の闇をあばくもの」などとばかり思っている高校生がいたら、そのイメージを少しは払拭できたかもしれません。しかし、それが心理学への興味をかき立てるものになっていたかどうかは、実のところよくわかりません。

そして、今回の授業。私は5コマめを担当したため、さすがに超入門編は不要。今回は、社会心理学で扱われているテーマの紹介とその中でもおもしろい（と私が思っている）社会的認知を中心に話を進めようとして準備しました。

とはいえ、日常生活の中で「社会」は「問題」と対提示されることが多いので、社会心理学は「社会問題」を扱う領域と思われる可能性がなきにしもあらず。ということで、「社会心理学は、日常生活を送っているうちに人々との関係の中で経験するいろいろなコトについて研究する分野」というきわめて荒っぽい定義から開始しました。自己だって文化だって「人々との関係」でくくると自分を納得させ……。

そして、ここで高校生の「当たり前」に挑戦。
①怒りを感じたり表に出したりするのはよくないとされるのに、なぜ人は怒りを感じる？
②「どんな人が好き？」ときかれたら「優しい人」と答える人が多い。でも、通学電車の中でよく見かけるけど、一度も話したことのない人を好きになったりするのはなぜ？
③本当は家に帰りたかったのに、友だちに誘われると一緒に買い物に行ってしまうのはなぜ？
④おしゃべりしているときに、相手がよそのほうに視線を向けてしまうと話がうまくできなくなるのはなぜ？
⑤オリンピックで自分の国を応援してしまうのはなぜ？ などなど、身近なところから疑問を投げかけてみました。

もちろん、こうした「なぜ」にすべて答えられるほどの時間もなく、また、私にはそのような知識がありません。このような問いかけによって高校生に伝えたかったメッセージは、心理学をかじるとそれまで何とも思わなかったことが不思議に思えるようになるということ、そし



Profile — 森永康子

1987年、広島大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。安田女子短大、ピッツバーグ大学研究員、神戸女学院大学を経て2012年より現職。博士（教育心理学）。専門は社会心理学、ジェンダー心理学。著訳書は『認知や行動に性差はあるのか：科学的研究を批判的に読み解く』（単訳、北大路書房）、『ジェンダーの心理学：「男女の思い込み」を科学する』（共著、ミネルヴァ書房）など。

て、（社会）心理学者の多くはこうした一見「当たり前」と思えるようなことに疑問を投げかけて研究していること。それぞれのテーマについて深く研究している心理学者でさえ、完全な答えを用意することはできないこと。さらに、そのことが大学で心理学を勉強し、研究していく理由のひとつなのということ。もちろん、こうしたメッセージが高校生の皆さんにどのくらい伝わったのかはわかりません。しかし、もし日本のどこかの大学で心理学関係の学部学科の受験者数が少しでも増えたとしたら、その中の1人か2人は私、いや我々5名の広島大学教員が行った授業の成果かもしれません。

さて、元に戻りましょう。授業の時間は60分です。実は、前置きだけでかなりの時間を使ってしまいました。本来の中心テーマは社会的認知。その中でもポイントは「私たちのものの見方にはさまざまなエラーがある」ということでした。日常生活では「自分はものごとを客観的に見ることができる」と思い込んだり、「客観的に見ても、あの人は……」と語ったり。「客観的であるとは何か」という哲学的な問題はさておき、講義では「他人を見るときに客観的であることはまず無理」という立場で話をしました。私たちは自分でも気づかないうちに、見たいものを見ているのだと。

講義で使った専門用語は「確証バイアス」「基本的帰属エラー」「自己スキーマ」「ステレオタイプ」です。社会心理学をかじった人ならば、これだけの言葉からだいたいの内容は想像できると思います。それでも誌面の都合で、若干の説明を加えます。

使った素材は、血液型ステレオタイプが喚起されるとそれに一致する情報に注目しやすくなることを示した坂元（1995）の研究（実験社会心理学研究、35巻）。血液型と性格との関係は

ずいぶん昔からその真偽が論争されていますが、ここでは、「A型」だと思ってその人を見ると、A型のステレオタイプに当てはまるところに注意がそそがれやすくなるといったことの説明に用いました。

ある人の行動の原因を考えるときに、状況のことをあまり考えず、性格や態度などのせいにしてしまいがちな基本的帰属エラー。これについては、他者から指示されて書いたことを知っていても、カストロ支持のエッセイを書いた人をカストロ支持だとみなす傾向があることを示したJones & Harris（1967）の研究（Journal of Experimental Social Psychology, Vol.3）を紹介。

そして、○で囲んだ特性語を実線で結んだネットワーク図（あまりに手作り感が強すぎて、ここでお見せできない）を用いて、自己スキーマやステレオタイプを紹介。自分や集団についての知識が他者を見るときにどのように影響するのかを簡単に説明しました。

授業を行ううえで参考にしたのは、上瀬由美子著『ステレオタイプの社会心理学』、山本真理子・原奈都子著『他者を知る』、山岸俊男監修『カラー版徹底図解 社会心理学』。これらは出版社とともに、社会心理学に興味をもった高校生に「おすすめの本」として紹介いたしました。もちろん、しばらく前に私が中高生向けに書いた『女らしさ・男らしさ ジェンダーを考える』（北大路書房）をこっそりと紹介したのは言うまでもありません。

こうして2013年の本学における「高校生のための心理学講座」は終わりました。この講座が心理学のイメージを実像に近づけ、なおかつ高校生のみなさんの心理学への興味をさらに駆り立てるものになっていたら、これほどうれしいことはありません。